

景龍宮廷文学の創作基盤

安東, 俊六
九州大学文学部 : 助手

<https://doi.org/10.15017/9817>

出版情報 : 中国文学論集. 3, pp.13-24, 1972-05-01. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

景龍宮廷文学の創作基盤

安東俊六

序

初唐の文学の主流は、宮廷サロン文学であった。六朝以来依然として絶対的な優勢をほこってきたこの宮廷修辭主義サロン文学は、則天武后の治世に一段の盛況を呈し、やがて中宗の景龍年間（七〇七—七一〇）に至って、宮廷修辭主義文学の總決算ともいべき最高潮期に達した。景龍年間の宮廷サロン文学の盛況ふりは、「唐詩紀事」巻九・李適の条に記された四十余回の宴集の記事や、現存する応制詩が三百首になんなんとする膨大な数に及ぶという事実からだけでも容易にうかがい知ることができ、しかし景龍年間の宮廷サロン文学が文学史上に特筆すべき意義をもつのは、ただに唱和された応制詩の数量の膨大さによるものではない。それは、景龍年間に、この応制詩という特定の文学の中だけにかぎって、従来長く歌謡調の詩体として軽視されてきた七言詩が、七言律詩という確立した形式をもって格調高い文学的形式として完全に定着したことによってである。

ところで、たしかに景龍年間に宮廷文学サロンにおいては、中宗をとりまく詩人達によって数百首にも及ぶ応制詩の唱和がなされ、この応制詩の中だけにかぎって、景龍三年から同四年にかけてのわずか一年あまりの短期間に、七言律詩の韻律がほぼ完全に完成の域に達したのであるが、今この応制詩の唱和がおこなわれた宮廷サロンの情況をつぶさに観察してみると、そこには安易に見過すことのできない意外な現象が見られることに気づく。その意外な現象とは、応制詩が唱和された文学サロンの外面的な情況が、七言律詩という全く新たな画期的な文学形式が創造されるにはあまりにも不向きな、否むしろそれを不可能ならしめるに近いものであったということである。いかえれば、応制詩の唱和のほとんど全てが天子の催す酒宴の座興であり、詩を競うゲームとしての遊戯性を色濃く帯びたものであって、一般的に言って、こうした情況のもとでの詩作はむしろ低俗化する傾向こそ確率高くもつものであったとしても、およそ新たな詩形式が完成するといった画期的で飛躍的な発展は望み難いはずである。ところがこの場合には、こうした一般

は、中宗にとつていたって造作もないことであつた。勿論直接的な動機ではなかつたとしても、これもサロン形成の大きな契機となつたであらう。かくして形成された景龍宮廷文学サロンは、中宗が景龍四年（七一〇）六月章后に毒殺されるまでの約一年余の間、先掲の李適伝に名を列ねるような詩人達によつて華かに彩られることになるのである。

ところで、このサロンに参集した詩人達の中には、いささか特異な存在の詩人が数人いた。先掲の李適伝には続けていう「帝感するところ有れば即ち詩を賦し、学士皆属和す。当詩人の歎慕するところなり。然れども皆狎猥佻、君臣の礼法を忘れ、惟文華を以て幸を取るのみ、韋元旦・劉允濟・沈佺期・宋之問・閻朝隱らの若きは、它的称なし。

特異な存在の詩人達とは、ここに「惟文華を以て幸を取るのみ―中略―它的称なし」とかなりあからさまに軽蔑をうけている韋元旦・劉允濟・沈佺期・宋之問・閻朝隱ら一連の宮廷詩人のことである。この中でもとりわけ沈佺期・宋之問・閻朝隱の三詩人は、神龍元年（七〇五）の政変で嶺南に流貶された罪人であつたにもかかわらず、中宗に文学の才を愛されたために学士に迎えられたきわめて特異な経歴の持ち主であつて、しかも彼らはこの宮廷文学サロンのもつとも代表的な花形スターであつた。景龍宮廷文学サロンにおいて、構成員の中にこうした特異な性格をもつ詩人達が含まれていたこと、しかも彼らがこのサロンの最も中心的な存在であつたといふことは、このサロンの文学の性格を大きく規定することになるのであるが、しかしこの問題は後述することとして、ここでは、こうした詩人達を中

心に膨大な数の応制詩の唱和が行われたサロンの模様を詳細に見ていくことにしよう。

今日景龍宮廷文学サロンの盛況ぶりをもつともよく伝えているのは「唐詩紀事」巻九・李適の条である。早くは修文館直学士であつた武平一に「景龍文館記」十巻があつて、おそらくはこの書がもつともいかにその盛況ぶりを記述していたものと推測されるが、今は散失して断片的な記事しか残つておらずこれをうかがうがよすがもない。したがつて今日では「景龍文館記」等に依據して書かれたものと考えられる「唐詩紀事」を重要な拠りどころとするほかはない。李適の条の記録によれば、景龍二年四月から同四年六月までの間に、中宗が御死や諸公主・高官達の邸第及び都城内の寺院に行幸して催した宴集は、公的なものだけでも四十余回の多きを数える。そしてこうした宴集で感従する群臣に唱和させた応制詩の数は、現在作品が残つているものだけでも總数二百数十首。一回の宴集で唱和された応制詩の数では百余篇にも及ぶ大規模な宴集もあつた。ここで、応制詩の数が百余篇にも及んだという景龍三年正月晦日の昆明池での応制詩唱和のさまを見てみよう。「唐詩紀事」巻三・上官昭容の条には次のように記している。

中宗正月晦日昆明池に幸して詩を賦し、群臣制に応ずるもの百余篇。殿前に帳して綵楼を結び、昭容に命じて一首を選び、新翻御製曲を為らしむ。從臣悉く其の下に集まる。須臾にして紙落つること飛ぶが如く、各々其の名を認めて之を懐にす。既に進み、唯沈・宋の二詩下らず。又時を移し、一紙飛び墜つ、競ひ取りて観るに乃ち沈の詩なり。其の評

を聞くに及んで曰く、「二詩の工力悉く敵するも、沈詩の落句に云う「微臣彫朽質 羞視豫章材」、蓋し詞氣已に竭く。宋詩に云う「不愁明月尽 自有夜珠来」、猶ほ健筆に降る」沈乃ち伏し、敢へて復た争はず。

宴集の規模の大ききもさることながら、これはまさしく演出効果満点の詩のコンクールである。綵楼から舞い落ちる詩篇の紙ふぶき、それを一喜一憂しつつ見守る群臣の目、ややあつて衆目注視のうちにひらひらと舞い落ちてくる一片の紙、これはさながら一幅の絵の光景である。

ところでここで注目すべき点は、この場合の応制詩の唱和が詩のできばえを競う一種の競技であつたという事実である。中宗はこのとき百余篇もの多くの応制詩を唱和させているけれども、その一篇一篇の作品に関心をはらつてはいない。中宗の興味は、これら多くの作品の中から誰の作品が選出されるのか、もつぱら選出の過程そのものへの興味と、最優秀作品一篇に対する興味につきているといえる。更に穿つた見方をすれば、作品自体への興味よりも、詩作の優劣を競わせるといふ競争の行為そのものへの興味の方がはるかに優先していたと見ることが出来る。そしてこれがあながち臆測でないことは、次に掲げる中宗の「九日登高詩序」及び「唐詩紀事」巻一（中宗の冬）の記事によつて立証することができる。

(一)人々四韻を題し、同に五言を賦す。其の最も後れて成るもの、之に引満を罰す。——中略——是の宴や、韋安石・蘇瓌の詩先づ成り、于経野・盧懷慎最も後れて成る、酒を罰す。

(二)帝自ら序を題し末に云ふ、人々四韻を題し、後るれば三杯

を罰す。日暮れて成る者五六人、余は皆酒を罰せらる。

(一)は景龍三年九月九日臨涇亭に幸したときの模様を記したものであり、(二)は同年十二月十二日新豊の温泉宮に幸したときの模様を記したものである。この両者の宴集における応制詩の唱和は、詩作の速さを競う、いわば速作りコンクールである。この競争は、詩のできばえの優劣を競わせ先掲の昆明池における競争に比較するとき、明らかに詩を競わせるといふ行為そのものにサロンの興味が集中していたことを端的に物語つていといえる。加えて、詩のできあがり方のおそい者に罰杯をふるまつたといふこの宴集における競争のルールは、応制詩の唱和が、われわれが一般的に考える高尚な文学的行為とはほど遠い、宴席の座興としての遊びの性格を色濃くもつものであつたことを強くわれわれに示唆しているように思われる。

ところで、応制詩の唱和が遊びの性格を色濃く帯びるに至つたことは、当時の宮中の雰囲気から考へるならば、むしろ必然的な結果であつたといえる。なぜならば、当時の宮中には、そうした傾向を誘発するに充分な、弛緩した空氣が瀰満していたのである。中宗は凡庸な天子であつたから、政權は野心家の韋后がほぼ掌中に握つていた。かつて中宗が則天武后によつて房陵に幽閉されたとき、禍福の常ならざることを説いて、中宗に復位の希望を失わせなかつた賢夫人韋后は、やがて中宗が復位すると、高宗朝において武后が行なつたそのままに朝政を預かり聞き、中宗を制して、かえつて中宗に口出しすることを遠慮させたほどであつた。政權を握る韋后は武三思と通じ、その武三思は上官昭容と通じ、上官昭容は吏部侍郎崔湜と通ずるとい

つた乱脈ぶり、宮中には朝野に示しのつかない振舞いが目立って多かつたのである。こうした乱れは中宗の公主達にも及び、公主はみなそれぞれ府を開き、生活は豪奢をきわめて、専横な振舞いは後をたたなかつた。夫の愛妾の耳や鼻を削ぎ落した宣城公主や、豪勢な邸宅を築いて庭の木石の値だけでも錢二十億万といわれた長寧公主の話など、一々数えあげれば枚挙にいとまがないが、とりわけ安樂公主の振舞いはけたはずれであつた。恣に任官の辞令を發行して官職を売つたり、邸宅を宮廷にまねて池をうがち、それを定昆池と称して昆明池になぞらえ、石を高く積んで華山に象どり、水を引いて天津に象どるなど、その生活ぶりは諸王達をはるかに凌ぐものであつて、ついには皇太子を退けて皇太女になることを請うたほどである。中宗はこれらの公主を溺愛して再々その邸宅に行幸したり、日をあけずに宮中に酒宴を催しては、ひたすら享樂に身をやつしていたのである。

こうした宮中の弛緩した空氣が、中宗の主催する宴集での応制詩の唱和に深く影響を及ぼすことはむしろ当然であらう。次にこの点を更に端的に確信させる二つの資料をあげてみよう。

(一) (景龍四年二月) 庚戌、(上) 及び后・妃・公主、三品以上の

拔河を観る。(「新唐書」卷四・中宗紀)

四年清明、中宗梨園に幸し、侍臣に命じて拔河之戲を為さしむ。——中略——七宰相二駙馬東朋たり。三相五將西朋たり。

僕射韋巨源・少師唐休璟、年老いたるを以て鉅に隨ひて陪

ふれ、久しく起つ能はず。帝以て笑樂を為す。(重較說郭所

取「景龍文館記」)

(二) 帝群臣と宴す。(祝) 欽明自ら言う、「八風舞を能くす。」

と。帝之を許す。欽明体肥りて醜きに、地に據りて頭を揺

がせ、目を睨し、左右顧眄す。帝大いに笑ふ。吏部侍郎盧

藏用歎じて曰く、「是の拳、五経地を掃ふ。」と。(「新唐

書」卷一百九・祝欽明伝)

(一)の記事は、景龍四年の清明節に中宗が高官に拔河戲を競わせた模様を記したものであり、年八十余才でなお進取いよいよ鋭かつた唐休璟も力尽きて久しく起ちあがることさえできなかったという。(二)の記事は、景龍四年五月中宗が近臣と宴を催したとき、時の国子祭酒で五経にもつとも明らかつた祝欽明が、身振りも卑俗に醜態に満ちた舞いを舞つたという記録である。このように国の柱ともいふべき高齢の賢臣に拔河戲を競わせて笑いぐさにしたり、時の国子祭酒が自ら進んで醜惡な舞いを披露したり、およそ賢明な天子の下では想像だにできない、不粹で低俗な中宗の遊びぶりである。このほかにも、宮女に店を設けさせ、公卿が旅商人よろしく宮女と交易して褻慢な言辞を弄するさまを見物して喜ぶなど、中宗の低俗な遊びの例を史書の中にまだいくつも見出すことができる。

こうした例からも端的に明らかにされるごとく、宮中の空氣は弛緩しきり、天子の遊びが全く低俗化したものになつていた當時にあつては、ひとり応制詩の唱和のみが高尚な行爲でありえたはずはなく、競作という一種の座興のゲームに墮していたとしても、むしろ当然の結果であつたといえるであらう。

応制詩の唱和が、かくも弛緩した宮中の空気の中で、しかも宴席でゲームの形式で競われた座興であったにもかかわらず、形式の面では七言律詩という新たな形式を完成に導き、表現の面でも修辭の美が極限にまであくなく追求されたその必然性は、一体何に基因するものであろうか。

「新唐書」の撰者宗祏は、「当時辭を属する者大抵浮靡と雖も、然れども得るところ皆観る可き有るは婉児の力なり」（「新唐書」卷七十六・章皇后伝付上官昭容伝）と、ひとり上官昭容の力に帰している。たしかに上官昭容は、景龍宮廷文学サロンにおける重要な存在であった。中宗や章后、長寧・安樂両公主の詩を代作するほどに、中宗から文才を高くかわれていたばかりでなく、群臣の唱和した応制詩を品第して優劣を判定した判者は、まさしくこの上官昭容であった。したがって、景龍宮廷サロン文学のリーダースhipをとったのは、上官昭容であつたといつても決して過言ではない。しかしながら、では上官昭容が、新たな詩体を完成させるほどにサロンの空気を緊張したものにしかたかといえは、それはむしろ不都合にも全く逆であつたといわなければならない。なぜならば、宮廷の風紀を著しく紊乱させて中宗を享樂に走らせた元凶こそ、上官昭容だつたからである。武三思・崔湜と通じて政治に参与し、章后に則天武后の稱制をまねることをそのかしたのも彼女であつた。確かに上官昭容はサロンの優れた詩の差第者であつたけれども、しかし彼女こそ応制詩の詩作を競作遊戯の方向に向させた張本人であつて、サロンの文学に緊張をもたらしたのは決して彼女ではない。

では景龍宮廷文学サロンに清新な緊迫した空気をもたらした

のは、一体何だつたのであろうか。ここで結論を先に言えば、私は、それはこのサロン文学のもつとも有力な担い手であつて、先掲の李適伝においてあからさまに輕蔑の辭を呈せられている宮廷詩人達の存在にほかならなかつた、と考えるのである。では宮廷詩人達が、いかなる理由によつて、この弛緩し切つていた宮中の空気の中でひとり応制詩の唱和のみを緊迫させるに至つたのか、次にこの点を明らかにしてみたい。そのためには、まず、応制詩に唱和するという文学的な行為が、宮廷詩人にとつてどのような意味をもつていたのかといふこと、つまり天子の遊びに従つて天子の命ずるままに御製に唱和することが、宮廷詩人の生活とどのような形で、どれほどに深いかわりをもつていたのか、といふことを明らかにする必要がある。ここでは、当時の代表的な詩人の一人で、宮廷詩人としてもつとも典型的なタイプをもつた宋之間をとりあげ、彼の宮廷における生活ぶりや詩作に対するとりくみかたを見ていくことにする。念のために何故に宋之間をとりあげたかといへば、一つには先述したように彼が當時を代表する典型的で著名な宮廷詩人だからであり、今一つには、全般的に見て伝記のはつきりしない宮廷詩人の中にあつて、ただひとり伝記を比較的详细に知ることができるといふのである。

私は先に、宮廷詩人は「新唐書」の中であからさまに輕蔑をうけていることを述べたが、宋之間についてもそれはそのままあてはまる。同書卷二百二・宋之間伝を見るに、それは次の五項の記事からなっている。

(一)武后が龍門に游んだとき、從臣に詩を賦させた。左史東方

虬の詩が先ずできたので、武后はこれに錦袍を賜わった。にわかには宋之間が詩を献じた。后はこれを見て嗟賞し、袍を奪つて之間に賜わった。

(二)張易之に媚付した罪で嶺南の瀧州に流されたが、洛陽にこっそり逃げ帰つて張仲之に匿われた。ところが張氏が武三思の暗殺を計画しているのを知り、兄の子の曇と再祖雍とに暴かせて罪を贖い、鴻臚主簿に擢んでられた。天下そのやりくちを醜とした。

(三)太平公主におもねて用いられたが、安樂公主が権勢を得てくるとそちらに行つておもねた。そのためにかえつて太平公主に深く疾まれて収賄の罪を発かれ、汴州の長史に左遷された。

(四)睿宗が立ち、獯險だとして欽州に流された。やがて桂州に死を賜わったが、ただふるえておろおろするばかりであつた。同時に死を賜わった再祖雍が使者に、之間が妻子と訣れをするのを許してくれるよう請うたが、之間は気も動転して家事を処することさえできなかった。再祖雍は怒つて「俱に罪をえて死するのに、何でそうおろおろするのか。」としかりつけ、食事をとつて沐浴し、死に就いた。

(五)魏の建安のち江左まで、詩律はしばしば変つた。沈約・庾信に至つて、音韻をもつて相婉附し、属对精密であつた。宋之間・沈佺期に及んでさらに靡麗を加え、声病を回忌した。句を約し篇を準ずるさまは、錦繡の文を成すようである。学ぶ者はこれを手本とし、沈宋(体)と称した。

この(一)から(五)までの記事は、内容から(一)・(五)と(二)・(三)・(四)の

二群に分けられる。(一)・(五)は文学に関する記事であり、(二)・(三)・(四)は為人に関する記事である。そして宋之間伝の紙幅の大半であつたことが強調されている。まるでこの伝は、この点のみを強調することに主眼を置いて書かれたかの感さえある。殊に(四)の記事は、冷静な再祖雍の態度と対比させることによって、宋之間を小心で軟弱な小悪党として印象づける役割を果している。そしてこの伝の記述が、後世ながく今日まで、為人の卑しきこれに過ぐる者はないといわんばかりの宋之間の人物像がっちり規定してきたのである。

ところがいま、この伝を更めて読み返えしてみると、この伝では、詩作に長じていたという点と為人が狡猾だつたという点とがただ単に特徴的に並挙されているにすぎず、両者の有機的な関連性は何ら説明されていないことに気づく。ましてこの二点からだけでは、具体的に一人の生きた人間の像は全く連想できない。それもそのはずであつて、この伝では、宋之間の像を猫くための重要な鍵を握る一面が語られていないからである。「新唐書」において、それが故意に記されなかつたものであるのか、あるいは偶然に見落されたものであるのかははつきりしない。しかし推測するにおそらくは故意に削除されたものだと思われる。私が「新唐書」の記述にはあからさまな軽蔑が見られるという論據の一つはここにあるのだが、それは宋之間の為人の卑しさを強調するのに不都合であつたがために、わざとこの伝から削り落されたもののように思われる。この「新唐書」が記さない宋之間の他の一面とは、彼が司馬承禎・釈懷一とい

つた名だたる高潔の人士とともに「方外の十友」と称せられていたという事実が、かたる意外な彼の脱俗的な一面である。もつとも、「方外の十友」という呼称は則天武后の治世のものであつて、景龍年間のものではない。したがつて、宋之問が「方外の十友」と呼ばれるに値したのは則天武后の治世だけであつて、景龍年間の宋之問はすっかり人柄が變つてしまつていたのだとする見方もありうる。しかしながら、こうした否定的な見方は当らないのであつて、現在行われている宋之問の作品集の中にも景龍の頃の宋之問が強く離俗を志向する一面をもつていたことを裏書きする作品が数首収録されており、又当時の詩人達の中で、沙門に贈つた詩や仏寺に遊んで作つた詩が群を抜いて多いという事実も、宋之問のこうした一面を端的に物語るものだと見えるであらう。

ここで改めて、詩作に長じていること、為人が卑しいこと、脱俗的な一面をもつていゝこと——の三点を総合的に考えるとき、これらをはじめ、宮廷詩人のもつ三つの側面を語るものとして、有機的なつながりをもつて、宋之問という一人の宮廷詩人の像を形造るのである。

先掲の(一)と(三)の記事は、宋之問の為人の卑しさを語るに充分である。なるほど、張仲之を罪に陥れた当事者が宋之問であつたかどうかは多分に疑問の余地があるし、また変節についても初め酷吏来俊臣に付し、俊臣が誅せられると張易之に付し、易之が誅せられると韋嗣立に身を託し、後は譙王に付したというように、宋之問よりはるかに目まぐるしい転身をみせた鄭愔のような人物もいて、「新唐書」が印象づけようとするほどには

宋之問は卑しい人物ではなかつたかもしれない。しかしいかに鼻眉目で見ても、張仲之の事件を契機に罪を贖つて鴻臚主簿に任ぜられ、武三思という大物の後楯を得たことは事実のようであり、安樂公主へのりかえを謀つたのも事実のようである。すると、宋之問が何故に心ある人々に齒されない、かくも卑劣な挙にでなければならなかつたのか、という大きな疑問が生じてくる。

こうした宋之問の無節操な変節が意味するものは、一体何なのであろうか。それは、宮廷詩人の生活が権力者の庇護を離れてはありえなかつたことを意味するものだと考えられるのである。詩才が秀逸なるがために宮中に召され、詩を作ることを唯一の實務として課せられている宮廷詩人の宋之問が、宮中における地位を保持するためには、第一に優れた詩を作ること、第二には自分の文才を認めて鼻眉して下れる強力なパトロンの獲得すること、この二つの至難な条件を克服しなければならぬ。宋之問の無節操な変節は、その第二の条件であるパトロンの獲得するための、いわば彼にとつては止むに止まれぬ必死な処生手段だったのである。パトロンは天子に働きかける力の大きい大物であるほどいい。その点では武三思は韋后と通じていたし、安樂公主は中宗にもつとも溺愛されていたから、宋之問にとつてはこれ以上に格好なパトロンはなかつた。こうしたパトロンのもとでさながら幫間のごとく阿ることは、彼が宮中に地位を確保しつづけるための最も実益的な方法だったわけである。先掲の(一)及び(三)の記事は、宋之問が當時に傑出した詩人で、文学史的な立場から見ても大きな意義をもつ詩人であることを

物語るものである。そしてこれは、とりもなおさず、先述した宮廷詩人の第一の条件——「優れた詩を作る」という条件を宋之間が充分に充たしていたことをものがたるものにはかならない。

ところで、「新唐書」に並挙されたこれらの二つの点が各々宮廷詩人の生き方と密接に関連するものであることはこれで明らかになったが、更にもう一つの彼の脱俗的な一面は、宋之間の宮廷詩人としての生き方とどのようなかわりをもつのであらうか。

三

応制詩の唱和が行われた場所は、御苑であつたり、あるいは公主や高官の邸第・都城内の寺院であつた。そして一度に数人ないしは百数十人も多くの詩人達が詩を賦して競つたが、応制詩の詩作には自らいくつかの大きな制約が加えられている。

まず第一には、うたう内容が著しく限定されていることである。第二には、多くの場合定められた共通の詩体を用いて、しかもわかち与えられた韻字を使用しなくてはならないことである。そして第三には、言うまでもないことながら、競作であるからには速く作らねばならなかったことである。これら三つの制約の中で、詩人にとつてもつとも難関だつたのは、第一の内容が著しく限定されていることである。

宴席の豪華さを叙し、庭園のさまを称美し、天子を讃えて、その華席に招かれた身の幸福を謝してうたうのが応制詩の決まりきつた内容であつて、この枠からはみ出すことは許されないし、又ありえなかつた。なぜ

ならば、応制詩は天子の遊びの楽しみをより助長するための芸、宴席に興をそえるための裝飾文学であつて、ただ美しく楽しささえあればよかつたからである。そして内容がこうした極端な限定を強いられるのみならず、诗情が湧くと湧かざるとにかかわらず一方的に詩作を要求される応制詩は、詩を競う詩人達が同一の座に在るのであるから、目にふれる一切のものが全ての詩人達に全く同一であるというきわめて特殊な条件の中で競われる。このきわめて特殊な条件の下での競作において、他の詩人を凌駕して勝つためには、内容はもつとも天子の意を迎えるものでなくてはならず、表現も新奇で衆目を引き付けるものでなくてはならない。ここに応制詩が修辭に走る必然性があるのであるが、それは一応置くとして、こうしたきびしい制約の下における応制詩の詩作は、宋之間がいかに性来非凡で文才豊かな詩人であつたとしても、他の詩人たちもいざれ劣らぬ詩才の持ち主ばかりであつただけに、詩作には容易ならざる工夫を要したはずである。しかもそれが時折りというのであればまだしも、ほとんど毎日がこうした詩作の連続であつたことを考えれば、宋之間にとつて、それはとても遊びといつた悠長な気分には浸つてはおれない、むしろ苦痛な詩作であつたと推測される。勿論優れた詩が常に即興で作れるものではない。彼は絶えず新奇な表現を求めて思索し、句を錬り、競作に勝つための詩の創作に全精力を傾注したのである。そして先にもその例をあげたような詩のコンクールに、あるいは宴席の競作ゲームに、詩の

詩作が競争であるとき、誰もが意地でも負けたくはない。ま

して宋之間には是が非でも一位を勝ちとらねばならないわけがあった。彼が宮廷詩人だったからである。宋之間にとつて、優勝することは窮極の目的ではなかった。また負けて罰杯をもらえることも単にその場の恥にとどまらなかつた。傑作をものにして優勝することは、彼の今日の詩名を高鳴らせるのみならず明日からの官職と栄光ある生活とを約束するものであり、罰杯をもられることは、当然その逆の結果の到来におのかざるをえない悲愴なことであつたはずである。これはあたかも芸人の生活のごとくである。芸人は芸が冴えをみせているうちこそ眞の客も沢山にでき、華かな生活が自ずと約束されているもの、しかし一たび芸に冴えを失つたとき、今までの栄光の座を他人に明け渡しておちぶれていかなければならない、そのはやりすたりの烈しさによく似ている。このように見てくると、宋之間の応制詩の詩作は、天子の遊びの意識とはおおよそうらはらな、冷たくとぎすまされた芸人的競争意識によつてなされたといふことができる。

宋之間の創作意識をこのように把握し、これと先に述べたパトロンに幫間のごとく阿ねる宋之間の処生の方法とを考へ合せてみると、従来見落されてきた宋之間の脱俗的な性格の一面がはじめて理解される。しかもそれはまた一方では、宋之間の宮廷詩人生活がいかに芸人的な生活であつたかといふことを、更にはつきりと裏付けることにもなるのである。

宋之間の日常は、天子の意を迎え、パトロンに媚び取入り、一方ではひたすら詩句を錬ることの連続であつた。彼はかかる宮廷詩人生活の緊張の連続にいかにして堪えたのであろうか。

彼がいかに先天的に宮廷詩人に向いたタイプを身にそなえていたとしても、その緊張をほぐす時間を持たなかつたはずはなからう。そしてむしろ、彼の平生の緊張の度合が強ければ強いほど、それから解き放された場合のほぐれの度合も常人のそれをはるかにこえて強かつたのではなからうか。次に掲げる「秋晚遊普耀寺」詩に、緊張から解放されたそういう宋之間の姿を見ることができぬ。

薄暮曲江頭

薄暮曲江の頭

仁祠暫可留

仁祠暫らく留まるべし

山形無隱聲

山形隠なく聲れ

野色徧呈秋

野色徧く秋を呈す

荷覆香泉密

荷は香泉に覆つて密に

藤縁宝樹幽

藤は宝樹に縁つて幽なり

平生厭塵事

平生塵事を厭ふ

過此忽悠悠

此に過りて忽ち悠々たり

当時仏寺は、巷間の雑踏を避けた都城内における閑静な場所の一つであり、世俗の塵埃から遠ざかつて遊べる場所であつた。「平生厭人事、過此忽悠悠」とは、秋の晩れにここに遊んだ宋之間が、日常の官界の煩しさと詩作の緊張感とから解放されて本来の自分に立ち返つたとき、率直に吐露した偽りない心情ではなかつたか。

そしてまた次の――

官遊非吏隱

官遊吏隱に非ざるも

心事好幽偏

心事幽を好む

考室先依地

室を考ふるは先づ地に依り

為農且用天 農を為すは且らく天に用る

輞川朝伐木 輞川朝に木を伐り

藍水暮澆田 藍水暮に田に澆ぐ

独与秦山老 独り秦山の老と

相飲春酒前 相ひ飲ぶ春酒の前

この「藍田山莊」詩や「今日何処に遊ばん 春泉薬を洗ひて帰る」(「春日山家」詩)などに見られる、日常の生活とは隔絶した別世界に一時を遊ぶ宋之間の姿は、緊張の連続の宮廷詩人生活の間隙にふと食い入ってくる芸人的寂寥感を慰撫するため、あるときは山莊に遊び、またあるときは山野に遊ぶ緊張から解放された姿ではなかつたか。

宋之間にとつて、仏寺に遊んで詩を賦したり、沙門と交遊を結んだりすることが、よしんば人生を解脱するという仏教の第一義的な方向ではなかつたとしても、また山野に遊んで自由無礙の世界を希求することが、ただ単に一時的に名利の境を離れるための、いわば消憂の場として求められたものであつたとしても、宋之間が強く離俗を志向する一面をもつていたことは、まぎれない事実である。宋之間はこうした離俗の世界に一時的に精神を遊ばせることによつて、そこで新たな生き生きとした活力を培い、目まぐるしく複雑な官界の人間関係を巧みに泳ぎ、絶え間ない詩作の連続に見事に堪えたがために、当代随一の宮廷詩人の名声を勝ちとることができたのだと考えられるのである。そしてこれは言い換えるならば、時としてこうした自由無礙の世界に精神を遊ばせることなくしては、到底宋之間にも堪えられない阿諛と屈辱に満ちた、緊張の連続の宮廷詩人生活だ

つたのであろう。

むすび

宋之間を例にとつて、宮廷詩人の生活がさながら幫間のごとく阿諛に満ち、応制詩の唱和が冷たくときすまされた芸人的競争意識によつてなされたことを述べたが、このように宮廷詩人の生活を幫間のそれであつたと把握し、宮廷詩人にとつて応制詩の唱和が、芸人的競争意識によつてなされた冷厳な競争以外の何ものでもなかつたと理解するとき、こうした宮廷詩人達が構成員の中含まれ、しかも彼らがつとも有力なスターであつた景龍宮廷文学サロンの空氣が、いやがうえにも高潮し、緊迫したものになつたのは、むしろ当然のこととして領ける。宮廷詩人達は明日からの地位と生活をかけて詩作に取組み、一方高級官僚達は、そうした宮廷詩人を芸人と見下し、高官としての自尊心からも彼らに劣らぬ詩作を励んだ。このように唱和する詩人達は、みなそれぞれの立場から内にはげしく競争意識を燃して、峻烈な詩作の競争を展開したのである。したがつて、應制詩の唱和は宴席の裝飾的な遊びの文学であつたにもかかわらず、宴席の空氣とはうらはらな意外ともいえる緊迫した空氣の中で競われ、修辭の美を極限にまで追求した優美華麗な文學が生れたのである。そして應制詩におけるこうした修辭の美の追求と韻律の諧和とを求めたあくなき詩作のくり返しは、當時次第に着目されつあつた七言詩を意欲的にとり入れて、景龍三年から同四年にかけての短期間に七言律詩体を急速に完成にこぎつけ、ここに中国文學史上に確固たる位置を占める、景龍

宮廷サロン文学というサロン文学の空前絶後の大盛況がもたらされたのである。

註

- (1) 高木正一氏が「景龍宮廷詩壇と七言律詩の形成」(「立命館文学」二二四号)に詳しく論証しておられる。
- (2) 多少難を言えば、新・旧唐書の中宗紀などと照し合せてみると、「唐詩紀事」巻九・李適の条の記述には、日時などに関する明らかに誤りが何ヶ所か指摘できて、その信憑性は再検討の余地がないでもない。しかしこの場合、裏集のあった場所や回数に誤りは発見できないので、サロンの盛況ふりを知る資料としては充分である。
- (3) 「唐詩紀事」巻八・陳子昂の条に、「子昂・趙貞固・盧藏用・杜審言・畢隆沢・郭夔微・司馬承禎・馮懷一・陸餘慶、号方外十友。」と見える。
- (4) 同書巻二百六・武三思伝では、この計画を発したのは冉祖雍(宋之間の友人)・宋之慈(之間の弟)・李儉(之間の甥)だと記述していて、たしかに関係の深い人々の名前があげられているもの、宋之間の名はなく、「新唐書」の記述そのものにくいちがいがみられる。又、「新唐書」の記事は何に依拠して書かれたものであるのかはつきりしないが、「太平広記」巻二六三に引く「朝野僉載」や「通鑑考異」巻十二に引く「御史台記」など、宋人の引く唐人の雑伝記類の書は、いずれも之慈が姪の曇に発かせたととなっている。私にはここにも、宗那が故意に宋之間の所業にしたてようとしたのではないかという疑念を懐く。